

郷土の歩みから未来を学ぶということ

山形県は12月末から1月にかけてまとまった降雪に見舞われ、まさに真冬の様相を呈している。筆者もこの時期は野外を出歩くことをある程度は制限されざるを得ないが、逆にこの時期こそ屋内で地域の方々から学ぶまとまった時間が取れる好機でもある。

筆者が所属する「NPO 法人里の自然文化共育研究所」と県内高等教育機関の連合である「大学コンソーシアムやまがた」では、今年度「最上川学」プロジェクトに取り組んでいる。これは県内の農山漁村にすむ人々からその暮らしの知恵と技術、生き方を学ぶことを通じて地域づくりや課題に向き合える研究教育の形成していくことを企図するものである。その一環として、大学生、高校生、NPO スタッフや地域住民を交えて、各地でフィールドワークを行ってきたが、先日2泊3日の日程で鶴岡市関川と松ヶ岡を訪れた。

関川はご存知の方も多だろう、国の伝統的工芸品に指定されているしな織の里としてあまりにも有名である。シナノキから得られる繊維を使って糸を作り、伝統の折り機で織られるその布は、山里の手仕事ならではの温かみをたたえている。関川ではほとんどの家々でしな布の製法を伝承してきた。だがそのしな布も10年ほども売れない時期があったという。そこには住民の方も作った布がどこでどのように使われるのかをあまりに知らないでいたという反省点があった。転機はしな布を使って鞆や帽子などさまざまな工芸品にして提供していくということだったという。さらに農家個々で行っていたしな布の生産販売従来のやり方を変え、共同組合を作り、公民館も「しな織センター」として建設し村ぐるみで結束したことがしな織を村づくりの力にまで高めていく契機となった。年間1万人を超える人が戸数わずか40戸ほどのこの村を訪れるようになったという。だが今そうした交流人口や村の戸数も徐々に減る傾向にあるとう。住民はしな織をヒントに地域素材を利用した新たな産業を挑戦しようとしている。

松ヶ岡では、地元学ぶ「地元学」ということで、松ヶ岡のみなさんと地域調査を行ってきた。松ヶ岡は明治期に旧庄内藩の士族のみなさんが刀を鍬に持ち替えて、開墾してきた村である。お住まいの方々には旧士族だ。訪れてみてわかるのは、松ヶ岡の方々自分たちの歩んできた歴史をよく踏まえているということだ。その端的な表れとして「イモコボタモチ」という松ヶ岡独自の食べ物があつた。開墾当時の窮乏と苦勞の中、本来は米100%のところを芋を加えてぼたもちとし、それを雑煮としたものである。開墾当時を忘れないため4月7日の開墾記念日には各家で必ず食べるものという。その他の各種食べ物もまことに質素な印象のものながら、しかし工夫を加えて手作りの味わい深いおいしいものばかりであつた。また別の評価からすれば、今でいう健康食の根幹を伝統的に受け継いできたということも言えるのではないかと思う。そんな松ヶ岡も現今の厳しい農業情勢の中で、村ならではの暮らしやこれまでに残された様々な伝統的建築物等の存続が大変難しいものになっているという。

しかし、いずれの村々でもそこに住む里人は難しい課題を抱えながらも、ムラの成り立

ちに誇りを持ちながら、これからを展望するために力強い模索を続けている。筆者はそこに新たな地域創造の原動力を見る。もし外部からこうしたムラづくりにかかわれるとするならば、その分野が政策であれビジネスであれ、ムラから学びその内的力を生かし育てていくという謙虚な姿勢で住民の声に耳を傾け、向き合っていくことから始まるのではないだろうか。上から押し付け、よその利害で変貌する政局的政治にばかり翻弄されてはならないのである。